慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白井厚監修・慶応義塾大学経済学部白井研究会編著 慶応義塾消費組合史
Sub Title	
Author	富沢, 賢治
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.3 (1991. 10) ,p.724(192)- 727(195)
JaLC DOI	10.14991/001.19911001-0192
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19911001-0192

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」84巻3号（1991年10月）

書評

白井厚監修・慶応義塾大学経済学部
白井研究会編著

『慶応義塾消費組合史』

（慶應通信，A5版　347頁，1990年）

1

労働史研究が盛んなイギリスにおいては，労働組合史だけでなく協同組合史の研究がかなり熱心になされている。そこには協同組合運動を広い意味の労働運動の一環としてとらえる視点がある。また，協同組合が日常生活に密着する組織であるだけに，社会史研究，地域史研究においても協同組合史研究の成果が蓄積されつつある。

これにたいし，日本においては協同組合史にたいする関心はあまり高くなく，その研究成果の蓄積はまだ稀薄である。しかも，この研究領域においては整った資料が少なく，オーラル・ヒストリー的手法に拠らざるをえないところがかなり大きい。それだけに，関係者の生存中にできるだけ多くの情報を収集しておく必要がある。

本書はその根幹部分を構成するうえで，かなりの部分をオーラル・ヒストリー的手法に拠っており，それが見事に成功している。関係者の年齢を考慮すると，この時期を逸しては慶応義塾消費組合史の正確な構成はほぼ不可能となったのではないかとも思われる。

本書の意義として私はつぎの諸点をあげたい。

第一に，今日の日本の生協運動の形成に占める大学生協の役割は重要であるにもかかわらず，大学生協の歴史的研究は従来比較的手薄であった。本書は，現存の大学生協のなかで最古の歴史を持つ慶応義塾消費組合を研究対象とすることによって，研究史上のこの間隙を埋めることに成功している。

第二に，歴史研究の基礎をなすfacts findingの作業が徹底的になされ，慶応義塾消費組合に関連する資料の丹念な発掘とともに，組合に関連した人びとからの聞き取りが広範囲になされている。

第三に，このような徹底的な発掘作業の結果，重要な新事実（たとえば，三田消費組合や慶応義塾学生共済会について）が発見され，また，これまでの関連文献の叙述に散見される事実誤認が訂正されている。

第四に，明確な問題設定とグループ作業による綿密な資料分析に基づき，facts 相互の論理的関連が説得性をもって解明されている。組合史が，単なる編年史的叙述にとどまらず，テーマ別に分析・編成された問題提起的な歴史叙述となっている点に，本書の特徴がある。その結果，この慶応義塾消費組合という特殊個別の組合の歴史的分析のなかに，協同組合運動一般にかかわる理論的諸問題を考察する際の重要素材を多く見い出すことができる。

最後に，本書の作成過程そのものが教育的見地からして大きな意義を有している。本書は慶応大学経済学部の白井厚教授の指導の下，大学院生の杉本貴志氏をまとめ役として白井ゼミナールの3年生と4年生とが主に執筆したものである。学生諸君が協同して2年間という短期間でこのような注目すべき研究成果をあげえたということ自体，一つの教育実践として示唆するところが大きい。

このように本書は，慶応義塾大学の先輩学生諸君の自治運動の実践を一教授の指導下で後輩学生諸君が発掘・整理したものとして，研究業績と教育実践との両面からして評価されうるものである。

本書の監修者である白井厚教授は，「古墳の発掘や推理小説のなぞ解きにも似た調査によって，漸くこの組合史の骨格が明らかとなった」（「はじめに」）と述べており，学生諸君のまとめ

役をした杉本貴志氏は，「率直なところ，この作業はわれわれにとって時には大変な苦痛であった。しかし……これまで知られることのなかった資料に出会ったときの喜び，暗闇の中から塾消費組合の姿が徐々に見えてきたときの喜びが，われわれを支えてくれた」（「おわりに」）と述べている。両氏のこの発言が歴史研究としての本労作の作成過程をよく特徴づけている。

2

上述のように，本書の完成にいたるプロセス自体がこの労作をたいへん興味深いものにしている。事実の発見となぞ解きのプロセスが重要である場合，結論だけを紹介することはまことに味気無い。推理小説を読もうとする読者に真犯人をあらかじめ教えてしまうようなものである。このような味気無さを承知のうので，本書の骨組みを紹介しよう。

本書はつぎのように構成されている。

はじめに　白井　厚
序章　慶応義塾消費組合の虚像と実像　信田　馨
第一章　社会的背景　永杉　政信
第二章　慶応義塾消費組合の誕生　宮野健二郎
第三章　「株式会社」から「組合組織」へ　杉本　貴志
第四章　塾の発展と消費組合　橋本　隆祐
第五章　慶応義塾消費組合と学生自治　渡辺　慶介
第六章　慶応義塾消費組合と他の学生消費組合　鈴木　一正
第七章　消費組合としての慶応義塾消費組合　鈴木　一正
第八章　第二次世界大戦と慶応義塾消費組合　杉本　章元
補章　慶応義塾における協同組合研究　杉本　貴志
資料
おわりに　杉本　貴志

慶応義塾消費組合は，「消費組合」という名称を用いたという記録が残っている日本で最古の組合であり，敗戦の時点では最も長く存続していた協同組合である。また，現在の慶応義塾生活協同組合をその後身と考えるならば，今日の時点で最も長い活動期間を誇ることのできる組合である。

塾消費組合は1903年に誕生した。その誕生の経緯がまことに面白い。学生の空腹から生れたのである。すなわち，塾の寄宿舎では試験期になると舎生が腹を空かせて門限を破り食事に出てしまい，受付けと喧嘩になってしまう。そこで原因となる「空腹」を解決しようと，小川雄逸なる舎生が廊下あるいは空室に新聞紙を敷いてそこにパンと代金箱を置いた。この「公徳パン」がきっかけとなり，やがて一株50銭の株が舎生に売られ，出資金が集められ，それをもとに寄宿舎内に販売所がつくられ，文房具や食品などの生活用品が売られるようになったのである。

この「株式会社」が協同組合的組織に転換される経緯が，協同組合成立史の観点から見て，これまたまことに興味深い。改組（1906年頃）後の初代理事長になった高橋誠一郎は，こう述べている。「株式会社」の責任者たちが私腹を肥やしているという噂が立ち，学校当局の組合にたいする干渉の気配も見えてきたために，「本当に組合の原則でやろうじゃないかということになり，総会を開いたのですが，なかなか反対が強いのですよ。その当時，10割の配当をしていたのです。一株50銭の払い込みの株に対してですね。ですからなかなかいい株だったんですよ。で，それを結局新しい組合が買収することにして，払い込みの10倍で買収したと思います。50銭を確か5円で。そうして漸く新しい組合が成立したのです」。

こうして改組後の組合は寄宿舎の舎生全員を組合員とすることになった。また一般塾生にたいしても物品を販売するようになったようであ

る。

この改組は「本当に組合の原則でやろう」という点では協同組合形成史上前進を示すものであった。しかしながら，出資金にかんして大きな問題点をかかえるものでもあった。すなわち，「改組後の塾消費組合に出資金を納めるという制度があったという記録は全く存在しない」。出資金制度の不在により「組合員」の存在そのものがあやふやになってしまったのである。これはその後の組合史に大きな影響をおよぼすことになる。

1930年には塾消費組合の組合長が，寄宿舎生を組合員とするという制度はすでに廃止されたと証言している。すなわち，塾消費組合は組合員なき組合というはなはだ奇妙な存在になってしまったのである。その後1938年の組織の再改革により学生側役員が実質的に消滅するとともに，塾消費組合はほぼ完全に「塾の直営」による学校付属機関となり，学生の自助組織としての性格を失う。第三章の著者である杉本氏は「もし塾消費組合が組合員の出資金をもとに組織された完全な意味での消費組合であったならば，このように簡単に学校の付属機関になってしまうことはなかったのではないだろうか」と述べているが，このコメントは協同組合の本質にかかわって考慮すべき重要な問題を内包している。このような問題点をかかえていたにもかかわらず，杉本氏によれば，この時期の塾消費組合は「日本における学生による自主的消費組合運動のもっとも初期の，そして明治期においては稀有な実践例であった」とされる。この評価もまた妥当性を有すると言えよう。

塾消費組合の歴史を学生自治とのかかわりにおいて考察した第五章の著者，渡辺慶介氏は上記の問題にかんして，つぎのように結論している。「戦前の塾消費組合は『組合員』を持たないという点で民主性が欠落しており，一部の学生のリーダーシップに依存する存在であった。この消費組合は1930年代まで創立以来の『独立自尊』や『相互扶助』の理念をその中枢において維持することはできたが，やはり寄宿舎の興隆，時局の影響を受けやすいという限界を持っていた。こうした歴史から……我々が学ぶことは決して少なくないと思われるのである」。

まことにその通りで，読者はこの慶応義塾消費組合の歴史を一事例として，協同組合はどのようにして生れ，発展し，衰退するかという一般的な歴史的教訓を学ぶことができるのである。

以上，塾消費組合の組織性格の変遷を中心にして本書の内容をたどったが，その他に本書には「慶応義塾における協同組合研究」などの労作，100ページちかい豊富な資料が納められており，塾消費組合の歴史が多方面からアプローチされていることを付言しておこう。

3

冒頭で述べたように，組合史が編年史的叙述にとどまらず，テーマ別に分析・編成された問題提起的な歴史叙述となっている点に，本書の特徴がある。明示されていないが，本書全体の前提をなす著者たちの共通の分析視点は，「協同組合はいかなる要因によって生成，発展，衰退するか」というところにあるように思われる。それゆえ，多くの章においてそれぞれの問題視角から塾消費組合の協同組合としての性格が問題とされ，分析されている。このような問題設定においては当然のことながら，協同組合とはなにかという問題が最も根本的な前提となる。

本書においては前述のように，塾消費組合の協同組合的性格の弱点として出資金制度の不在が大きな問題点として扱われている。私はこの問題点とも関連させて，「加入・脱退の自由の原則」という協同組合原則に照らして塾消費組合の協同組合としての性格を検討することが必要であったように思う。

第三章において杉本氏は，寄宿舎の舎生全員を組合員としたことに関して，「組合員資格に関する問題が，改組後の塾消費組合の組織構成の上では最大の問題である」と述べ，つぎの二

つの問題点を指摘している。①一般塾生に対しても物品を販売していたにもかかわらず，組合資産を寄宿舎の共有とし，組合運営への参加を寄宿舎の舎生に限定したこと。②舎生が組合の出資金を払い込んでいないならば，彼らは厳密な意味での組合員とは言えないこと。そして杉本氏は，塾消費組合が学校の付属機関化した主要要因をこの出資金制度の不在に求めている。

この分析結果をさらに深みのあるものとするためには，私としては，上記の二つの問題点の他に「組合への加入・脱退の自由の不在」を付加すべきだと思う。「加入・脱退の自由」は，近代的組織としての協同組合の本質を規定する不可欠の原則である。この原則に照らすとき，寄宿舎の舎生全員を組合員としたことは，当時の塾消費組合が近代的組織としてまだ未成熟であったこと，中世の組織の特徴としての生活共同体的側面を残していたこと，それゆえ，「本当に組合の原則でやろう」という基準からして欠ける点があったことを意味することになる。このような分析視点を付加することによって，当時の塾消費組合の歴史的位置づけがより明瞭なものとなるのではなかろうか。

富　沢　賢　治
（一橋大学経済研究所教授）